

## 1 病弱な日本人？

私は自分自身を病弱だと思っている。しかし、私を良く知る人に言わせると、この上も無いほど、タフらしい。ところが、このエネルギーッシュで通っている私も（イタリア語では *energia* エネルギアという。）さすがに今回ばかりは少々こたえた。学期末試験から、ヨーロッパ選手権までの1週間は、体に無理をさせたなど限界を感じた怒涛の一週間であった。

今期もあいかわらずグループワークがたくさんあった。グループでやらねばならぬ宿題を片付け、眠さを我慢して授業を聞き、メールのチェックなどを終えて夜中に家に帰り、自分の担当分の PP を作る。

ストレスで過食気味になり、体調も不十分、気のめぐりもイマイチだった。最終日の試験を終えた後、私はいまだパリ行き荷造りもしていなく、部屋はごちゃごちゃの状態（カジノ *casino*, 英語では *messy*）だった。

何をするにも頭の中で考えて処理するのに時間がかかり、予約していた歯医者に行つて、パリ行きバスの出発時間ぎりぎりにとにかくスーツケースに最低限必要な物をつめた。

やること、考えることがたくさんあると、どれもこれも完璧にはできない。最悪の場合を考えて、最悪さえ乗り越えられれば何とかなる、という気持ちで行かないと神経が持たない。いろいろ忘れていたと思うが、まあ、仕方が無い。私に与えられる時間は一日24時間、私の体は一つである。

さて、パリ行きも強行軍であった。ヨーロッパでは宵の口前の明るさだが、夜の9時にミラノを出発、高速を乗り継ぎ、11時間かけて翌朝8時にパリに着いた。

パリといっても中心部ではなく、郊外、カルロス・ゴーンがでたとと言われる、エコーポリテクをその敷地に含む巨大な学校である。キャンパスが一つの街かと思うほど広大で、その施設を毎年、ヨーロッパの MBA 選手権開催地として提供してくれている。

## MBA スポーツ選手権大会記

ユキーナ・富塚・サントス

機能的なのか、無駄が多いのか未だにわからない、教会を改造した学校とはえらく印象が違う。

バスに揺られて11時間、連日の睡眠不足に加え、またしても眠れなかった。足の指先から疲労物質が出ているという感じがして、久々に夕食を抜いた。深夜過ぎには足元の不快感が取れ、すこしうとうとできるようになった。横になれないので、肩こりがとれず、ずっとしゃべってる仲間の声が聞こえていた。余談だが、このときになってやっと英語、イタリア語両方が意識しなくても耳に入るようになったと思った。

今回の私のエントリーは水泳とサッカーである。水泳は当初あまり真剣にやる気がしなかったが、女子の集まりが悪いらしく、一応考えていると言う程度の返事を水泳部キャプテンにしたら、リレーのメンバーに入れられてしまった。100Mリレーなので、泳ぐとしても25か・・・それなら、練習無しでも何とかなるかと思い、とりあえずOKのメールをだした。

水泳を始めたのは小学校2年の時である。当時「日本沈没」という映画、ドラマがはやっており、母親は私に「たとえ日本が沈没しても、お前は泳いでアメリカに行け！」と言った。なぜアメリカなのか、未だにわからないが、それから20年以上たった今、泳いではいけないが空を渡り、アメリカに行くことになったのは何とも不思議な話である。

それ以来水泳を続けている。中学時代に真剣につづければ、もっと背も伸びただろうとは思いますが、体育会系のノリで真剣にクラブ活動をしたのは高校時代である。それ以降は細々と、ジムに通ったりして泳いでいた。水泳部時代はあまり思わなかったが、水に入り、四肢を伸ばし、浮力を感じるだけで、十分に気持ちがいい。人は海から生まれたものなのだなと実感する瞬間である。

ちなみに去年は映画「グラン・ブルー」で有名なシチリア、タオルミーナの海にもぐったり、塩素ではなく、海の潮を味わって泳ぐ日々を過ごした。

おそろしく長いブランクがあるわけではないので、水泳なら大丈夫だろうと、なんとかやるだろうと、タカを括っていたのである。

## MBA スポーツ選手権大会記

ユキーナ・富塚・サントス

バスに同乗していた、この水泳部キャプテン、エジプト人のハッサンにレース前に練習ができるかと聞いた。アップ時間があるので、今日の午後、競技開始前にみんなに泳いでもらい、エントリーを決めるという。なに？今日、ええ、聞いてないよ、とはこのことで、この睡眠不足、絶食状態で水泳はキツイ。真剣に、「プールの真ん中で溺れたらどうしよう」と心配になってきた。

私の体調を考慮してくれ、私が泳ぐのは50のフリー一本だけとなった。いちおうアップ時に50を泳げるかどうか試してみた。何とか行けそうである。前半は通常の4かきに1回の呼吸で、後半はニパ（2かきに1回呼吸をすること）にしよう、とストラテジーを組み立てた。

試合だとスタートは飛び込みになる。水泳部の人にはわかると思うが、ゴーグルをつけて飛び込むと、その瞬間にゴーグルが取れる可能性がある。私もそうだが、コンタクト装着派は普段ゴーグル付で練習している人が多い。コンタクトプラスゴーグル派が、ゴーグルとコンタクト無しの見えない視界で泳ぎきるか、あるいは、飛び込みの際にとれないと確信し、あえてゴーグルをつけて視界を確保するか、ゴーグルとコンタクトは常に悩む問題である。

コンタクトを流したときの損害と、頭をプールの縁などにぶつけたときの損害を比較考慮し、私はコンタクトプラスゴーグル作戦をとることにした。スタートもゴーグルをずらさないよう気を遣わねばならず、おでこと胸に受ける衝撃は覚悟した。

飛び込みは3回練習した。意外にスタートで使うスタミナが多いので、酸素を温存するためクイックターンは止める、さらにコンサバなストラテジーをとることにした。

ああ、やはり・・・であるが、プールの水深も思ったとおり、一番浅いところで180cmである。休んでいる間も立ち泳ぎをしなければならず、カロリーの消費が激しかった。

約20年前の水泳部時代のこと、試合前でナーバスになると、コーチに向かって、こうお願いしていた。「私がプールの真ん中で溺れたら、応援スタンドから飛び込んで助けてくれますか？」と今回も同様のお願いをフセインにする。

体が疲れないようにするため、日焼けをさけ、体を温めながら出番を待った。みていると男子のレベルは高く、イアンソープかと思う泳ぎっぷりの人も見かけた。その昔、文武両道といわれた高校に通っていたときのことを思い出す。ビジネススクールに来る人だから、みんな勉強を相当しているに違いない。その一方でスポーツや、何かの趣味に黙々と打ち込み、いろんなところで人と競うシーンを持っている人が多い。

イギリスのロイヤルビジネススクールは組織立っており、戦略的に選手育成が行われているような感じがした。ちなみに翌日、我々女子サッカーチームはこのロイヤルに2戦して2敗するのである。

## 2 ウルフの涙

さて、いよいよ、あたくしの出番になる。すこしでも体重を軽くするため事前にトイレに行き、心臓麻痺を起こさないように、ややぬるめのシャワーをする。

「位置について・・・」で飛び込み台に構え、笛の音と共に飛び込んだ。最初の浮き上がりでダッシュである。水泳部時代からキックが強いと言われていた私としては真剣にキックし、自分としては最大限のダッシュをしてしまった。後半に力を温存しなければならないのに・・・

クイックターンは迷ったが、タイミングが合わないのでやめ、後半の12.5m前にニパにきりかえた。が、しかし、このあたりで体力の限界を感じる。その昔、試合のたびに、水泳部仲間と「最後の5メートルはいくら泳いでも近づかない」と話し合っていたことをふと思い出した。

ぼろぼろになりながら、なんとかタッチする。やはり、この組ではビリである。私と50mのフリーを泳ぐことになっていたエウロナがプールから引き上げようと、手を貸してくれた。が、自力で水からでることもできず、ロープに足をかけ、エウロナ、タイム係に引っ張り上げてもらい、ようやく飛び込み台に這い上がった。今の私の姿は、ロッキー山脈の岩棚を登り終えた穴戸開？に等しく、「ファイト・一発」のCMに使えるのではないかと思った。どうやら、この姿はビデオ撮影されており、夜のパーティで流れていたらしい・・・

キャプテン、フセインから「よくやった」とほめられた。しかし、かつては1日3000メートルを泳いでいた私である。そして、めったに過去をふりかえることはしない私である。けれども、このときばかりは、寄る年波には勝てず、「体力の限界」と涙を流した千代の富士を思い出し、一人プールサイドで「たそがれ」ていた。

### 3 サッカー体験 理想のジョカトーレ

初日の水泳でひどい目にあってる私は、初日の夕食に気を遣い、アルコールも取らず、ひたすら体力の回復に努めた。水泳競技後、十分にクーリングダウンをしてないので、筋肉痛が激しい。

いつものように、朝食はとらず、お茶とミネラルウォーターを飲み、サッカー場に向かった。

前日までにスタメンの発表があるはずだが、コーチからもわれらのキャプテンからも何の連絡も無く、イタリア方式だなあと思いつつ、フィールドに着くとすでにグループ A がアップをしていた。我々女子サッカーチームは力が均等になるように2チームに分けたようだが、前日飲み過ぎた人、負傷した人は遅れて到着である。

コーチのギリシア人、ジュードとは何と前日のバスで初めて自己紹介をした。彼は試合の直前に相手チームのレベルを把握し、それに合わせてスタメン編成を考えようとしたらしい。故にほとんどのメンバーが午前中に集まることになった。なるほど敵の情報が無い以上、チーム編成を効果的に行うにはいい作戦である。私は午前中の試合の後半からでるように指示された。

第一試合は昨年11月に惨敗をくらったロイヤルビジネススクールである。「奴ら」と言いたくなくほど、女性でありながら猛者がそろっており、着々と練習を重ねている。コーチ陣も豊富らしい。

我が校も負けてはいない。なにせ、国民の一人ひとりがトラパットーニ監督になれるほどサッカー好きなイタリア人である。当校も監督、コーチには不自由しなかった。現に私もブラジル人アンディにマンツーマンでキーパーの心得を伝授してもらった。さすがにブラジル人だけあって、サッカーはメチャメチャ上手かった。問題はすべて英語で説明させるので、こちらのボキャと理解力がイマイチであることだけである。

さて、第一試合、良くあるパターンであるが、試合開始後3分もたたないうちに先制点を入れられる。その後、モッコーニも攻撃のチャンスに恵まれるが、得点には結びつかず、1-0で後半となる。

## MBA スポーツ選手権大会記

ユキーナ・富塚・サントス

後半から私が投入され、左のディフェンスに着くことになった。私が密着マークをした相手は典型的ゲルマン系で、高めのボールはすべてヘディングされる。マークしようと前に立ちただかっても一撃で跳ね飛ばされる。

何度も書いているが、ラテンの国イタリアにきて、俄然、けんかっばやくなってしまった。ラグビーじゃないんだからと頭にきた私は、奴にパスが回るまえにタックルのごとく体当たり、思い切って相手のすねを蹴飛ばし、ユニフォームがちぎれるかと思うほど、引っ張ったりした。もちろん、私も多々転んだが、相手にも数回転倒を食らわせた。なにせ戦車かパトリオットミサイルかという相手である。ガンガンシュートをうってくる相手に小柄な日本人の私としては、正攻法では太刀打ちできない。

ここに来て、はたと思う。イエローカードを食らってはいけないと。すると私の考えることは一つ。アグレッシブに接しながら、「わざとじゃないの」という態度を忘れないことである。体当たりで相手の攻撃を阻止しつつ、すばやく倒れた相手に「Sorry」と謝っておく。自分が倒されたときは1、2秒長く地面にうずくまる・・

グラウンドに倒れこんで、かつてサッカーファンの友人の言った言葉が頭の中にフラッシュバックする。「イタリア人はずるいから、ちょっと当たただけでも大げさに痛がったりするんだよ・・、イタリア人のユニフォームは特殊な生地できていて、いくらでも伸びるようになってるんだって・・・」

私の体当たりのディフェンスに拍車がかかる。気付くと日本語とイタリア語で相手を罵倒している。

灼熱の太陽の下、この友人の言葉を思い出し、グラウンドに落とした自分の影にむかって、わたしはこうつぶやいていた。

「ああ、あたくし、身も心もイタリア人になりました・・」

ディフェンスとしては快挙であるが、最後まで相手の得点は1に押さえ、初戦を終えた。

## MBA スポーツ選手権大会記

ユキーナ・富塚・サントス

開催校との第二試合もスタメンで出場、相手チームにアジア系の前園選手をほうふつとさせる、強力なストライカーがいて、（余談だが、彼女の場合も男女の区別が難しい）ディフェンスとしては翻弄された。

髪長さ、肌色、目鼻の配置からは中国大陸内部ではないかと思えるが、体系は東南アジア系、サッカーで鍛えたふくらはぎがそのキック力をアピールしていた。彼女の場合、いかにブロックしようとしても、テクニックで交されてしまうので、私と右ディフェンスの二人で「前園封じ」の特訓を受けた。

前園は左ストライカーである。ピッタリつこうとすると、すばやくパスを出してしまうので当方がボールを奪取する機会はない。一定の距離を空け、キックを打たせてそれを奪うという特訓である。相手が行動するよりすばやく右に動き、相手のキックをブロックする練習をした。並々ならぬ破壊力をもつ、奴のシュートを考えると、我々の練習は多少なりとも役立つはずであった。

特訓の甲斐なく？たびたび「蒙古襲来」という言葉が相応しいような、激しい攻撃を受け、私は走り回ってへとへとになってしまった。私の負傷後キーパーの特訓を受けたキャプテン、リサが蒙古の襲撃をことごとく食い止めてくれたので我々は両チーム無得点のまま試合を終えた。

試合後に、午前中のゲームには出場しなかった、わがチームの秘密兵器リンダ（ウルグアイ人）からコメントをいただく。彼女はバレーボール、ビーチバレーの総元締め（得点元）なのでサッカーには勝ちあがった時の秘密兵器として温存しておくというのが、監督の意向であった。

ユキ、あんたのプレーは最高だった。

とことん相手を邪魔するしつこさは超一流、けれども同時に礼儀正しい。あんたのプレーはサッカー選手としては最高！と。

彼女とはイタリア語英語半々で会話する。このときは英語でこういわれた。 **Rude but Polite** 超失礼だけれど、礼儀正しいと・・・超失礼はイタリアスタイルである。ルールに外れてはいけないと相手を気遣うのも、いらぬ荒波を立てないようにしようと気遣う

## MBA スポーツ選手権大会記

ユキーナ・富塚・サントス

のも日本流である。してみると私のプレースタイルは和伊折衷であり、これが正しきプレーヤー (giocatore) の姿であるということだろうか？ Rude と polite は相反する表現であっても、両者を併せた rupo が理想のジョカトーレの態度ということになるだろうか。

ヨーロッパのほかのビジネススクールと比較して思うのは我々のラテン気質、子供気質である。開会の挨拶もみんな10分と聞いていられない。おしゃべりを始めたり、遅れてきたり、途中で抜け出したり、とにかく我慢のお稽古ができないのだ。

そのくせ、食べ物に関して真っ先に押し寄せるのはイタリア人である。パーティには深夜近くに送れて現われ、夜中の3時、4時まで飲み、踊るのもラテン系である。ちなみにこういう宵っ張りスタイルはスペインの方がより顕著である。

スポーツの野次も超一流である。あれほど、審判には食って掛かるなどいわれているのに、女子サッカーの準決勝で多くのイタリア人が野次を飛ばし、散発的で騒がしい声援を送る・・・

今回の選手権でまたもや、イタリア人の真髓について勉強し、ヨーロッパという大陸、各国の文化をまのあたりにした。日本人の私としては、日本に帰る日のことも考えねばならず、日本人としての、特に女性としての品位を考えねばならないのだが・・・

ヴァイ！ヴァイ！ヴァイ！と大声で応援している自分に気付き、日本の社会復帰は難しいかもしれないと、若干不安に思った。

MBA スポーツ選手権大会記

ユキーナ・富塚・サントス